

杜鵑産鶯巢

〔和漢三才圖會四十三〕杜鵑略○中

按略○中 杜鵑略○中 不能營巢窺鶯之虛巢借生卵

〔萬葉集九雜歌〕詠霍公鳥一首并短歌

鶯之生卵乃中爾霍公鳥獨所生而己父爾似而者不鳴己母爾似而者不鳴宇能花乃開有野邊從飛
翻來鳴令響橘之花乎居令散終日雖喧聞吉幣者將為遐莫去吾屋戶之花橘爾住度鳥

反歌

搔霧之雨零夜乎霍公鳥鳴而去成何怜其鳥

〔續世繼十數鳥の打聞〕菩提樹院といふ寺に、ある僧房のいけのはちすに、鳥の子をうみたりけるを

とりて籠にいれてかひけるほどに、うぐひすのこより入て、ものく、めなどしければ、うぐひすのこなりけりとまりにけれど、子はおほきにて、おやにもにざりければ、あやしくおもひけるほどに、子のやうくおとなしくなりて、ほと、ぎすとなきければ、むかしよりいひつたへたるふるきこと、まことなりと思ひて、ある人よめる。

親のおやぞいまはゆかしき郭公はや鶯のこは子也けり、とよめりける、萬葉集の長歌に、うぐひすのかひこの中のほと、ぎすなどいひて、このことに侍なるを、いとけふあることにも侍なるかな、藏人實兼ときこえし人の、匡房の中納言の物がたり談抄江にかける文にも、中ごろの人、このことみあらはしたることなど、かきて侍とかや、かやうにこそつたへさくことにて侍を、まぢかくかゝることにて侍らんこそ、いとやさしく侍なれ、右京權大夫頼政といひて、歌よめる人のさることありとき、て、わざとたづねきて、その鳥の籠にむすびつけられ侍けるうた、

鶯のこになりにける時鳥いづれのねにかなかんとすらん、萬葉集には、ちゝにてもなかなかず、はゝにてもなかなかずと侍なれば、うぐひすとはなかなかずや有けんなど、いとやさしくこそ申めり